

紅い花

(十二)戦

琉紅

(十二) 戦いくさ

晴れ渡った朝、今帰仁城から一里(四キロ)程離れた海原に、大型の船が二十隻程、海岸に沿って右へ移動していくのが見える。

既に到着した船からは兵士等が、数多く羽地はねじの土地に上陸していた。

名護軍の先導の元、中山本陣軍は天幕を張り、あわただしく陣営を設置している。

総攻撃の前に整列を始めた。総勢二千は超えている。数百頭に及ぶ馬の群れも見られ、鳴き声や蹄のぶつかる音が徐々に大きくなっていく。

本陣の旗の下、天幕の中に、尚巴志、大君、軍師等、青江が揃った。

日差しが強く照りつけ、大地は乾き、兵士の立てる砂埃は大地の色を緑から赤茶に変えた。

中山本陣の天幕に、伝達兵が忙しそうに出入りしている。今帰仁城の本丸からもその様子は確認できた。

北山王ハンアンチが死したことは、まだ中山には伝わっていなかった。

今帰仁城の本丸には美久、賢龍、各部を指揮する将兵が数

人、城周りの地図を見ながら対策を練っていた。美久は、情報を漏らさないように、最大の注意を払うよう伝えた。

ふと、中山軍の陣地を見て身震いした。

「すごい軍勢、二千、いや三千人。すべての、感覚を研ぎ澄ませないといけない。すべてよ、すべてを味方にしないと、負けてしまう。すべての力を……」

考えを巡らせながら窓の側に近づいた。

「奥方、窓の側に立つては弓矢が飛んできます。お気をつけ」

潮平が声をかけた。

「ええ、ありがとう。でも大丈夫です。風は後ろから吹いているのよ。風の神が味方して、乱れている。中山の弓の兵は、やがて後退するわ」

美久は外の様子、特に城の壁の内側にある木々の葉の動きを注意深く見つめた。

「こんなに、晴れているのに、風が乱れている、北風、南風がこの城の後ろで今、ぶつかっている。風、そう、それが遥ニライ、カケタイが遠くで生まれたのね」

「風が強くなりそうですか?」

潮平も窓の外を見た。

「あなたは、この城に仕えて長いのですか」

「賢龍殿の幼き頃から、お側にいます。あの通りの気性ですから、心配事が絶えませんが。おかげでこんなにやせてしまつて」

美久は、潮平の狭そうに装備した甲冑から、はみ出るお腹をみて、

「ふふふ……はっはっ」

と、口を押さえて笑い出したが、無理やり途中で止めて、「……そういえば賢龍殿の奥様は病気で亡くなったとか。どのようなお方だったのですか」

と、潮平の顔を覗く。目は厳しく、容疑者の罪を白状させるかのよう。

潮平は、

「それはお美しい、優しい奥方でした。あつ、美久様も、さらにお美しいです」

と腕で顔の汗をつきながら、慌てて付け加えた。

「民にも慕われていたのでしょうね。流行り病だったのですか」

「いいえ、心労が募り病になられたと聞いております。幼き頃からの許嫁いとがけで、お互いを思いやる仲睦まじいご夫婦でした。ですから、お亡くなりになったときの賢龍殿の悲しみをいったら、言葉にできないほどでした。側に控えているのも、

辛いほどでした。小さいころは、私がいないと泣きながら探し回るので、ゆつくりと厠とせにもいけやしない……」

「まあ、そんなことも。今の賢龍様からは想像できませんわ。潮平殿が、幼い頃から支えていらつしやつたのですね」

「はい！ もちろんです」

ドンと、胸をたたいた。

「そうだったの……」

美久は自分の指先を噛む。

「でも、久高島で美久様に出会い、昔の賢龍様に戻ることでできました。感謝しております。どうぞ賢龍殿を支えてあげてください。ああ見えても寂しがり屋ですからね」

幼い時より賢龍の側に仕えていた潮平は、兄の様な存在なのである。美久は心の奥で何かを決心するかの如く、大きく深呼吸をし、潮平の前を離れた。

美久は、城内の兵士の様子を見渡した。幾重にも重なる城壁だが、第一の城壁はすでに破られて、敵兵が待機していた。

第二の壁、門、倉庫、屋敷は昨日からの火事が続いている。

「火消しをしている兵士で、弓を引ける兵をすべて本丸の庭に集めなさい。そして、残りは壁を離れ、天空に楯や戸板を掲げ待機です」

「え、火事は？ 壁は、兵士がいないと、門はすぐに壊され
ます」

「いいから。それと、伝達兵をすべて私の周りに集めて……
本丸の窓を全て開けなさい」

「え、弓矢が飛んできませんよ」

「私を信じて。矢はここまでではもう届きません。特に弓の上
手い兵士は、本丸の庭に集合させなさい」

最初の城壁内を埋め尽くす三百人余の連合兵が声を出し、
二番目の城壁に数多くの梯子はしこを掛けた。

（鳥の動きを知りたい）

と、本丸の窓を開けると、戦の声、周りの音が四方八方か
ら入ってくる。

同時に、目前に鳥達の飛び交う多様な動きも見られた。本
丸の将兵等は、中山の本陣からの城攻めの怒号、それをパッ
クに進む連合軍の數に圧倒され動揺した。特に若い兵士はが
たがたと震え、手にする刀を落としたりした。

本丸前の庭とその下の壁庭で、五十人余の生き残った弓兵
は、外に向けて矢を引く構えで整列した。

「すべての矢を、私の手の向きに」

と、美久は北東の空に向け、右手を指し示し微妙に調整す
る。

上と下にいる伝達兵がその方向に合わせる。弓を射る兵士
は伝達兵から射る方角を知り得るのである。

皆、美久の手の指し示す方向に構え、美久の命令を待った。
太鼓の音、怒号、敵兵が第二の門を叩き壊している音が響
く。

最初の城壁の上に、敵兵がよじ登り、門が破壊されて押し
寄せた瞬間、

「それ、今です！」

本丸の兵士から一斉に放たれた五十本の矢は、北東方向上
空に、渡り鳥のように飛んでいく。美久は遠い空の風を諒ん
でいたのである。

矢は途中、城後方からの風に乗って矢先を北へ変えつつ、
細い列に並び、第二の城壁の門から入ろうとしていた中山の
兵の先頭めがけて落ちていった。彼らは、進入後、すぐに弓
矢の雨を浴びたのである。苦痛を伝える声が響き渡る。

第二の城壁を上る中山連合軍からの悲鳴により、後続の敵
兵に動揺が広がった。再び風に乗った矢が、鳥のように通常
の二倍から三倍の距離を飛び、夕立の雨粒が直撃するかのよ
うに降ってきた。

風の道を探す鳥たちは驚き、矢の群れから離れ去っていく。
中山の本陣からは、晴れ渡った空を、光の粒の群れが飛び

交い、城壁をよじ登る兵等に、光のシャワーが浴びせられている光景だ。

平地で指揮する青江は、眩しがるだけで何が起こっているのか理解できなかった。

美久の髪や着物は、本丸に吹きける風で乱れる。少しずつ手の指し示す方向を調整し、下庭の弓兵の場所をずらし、矢の落ちる位置と幅を制御していた。

青江等も同様に本丸へ向けて特製の弓を射るが、今度は風に戻されて全く届かない。

連合軍の兵士は動揺し、一斉にどこともなく空に向かって楯や木板を掲げ、矢を防ぐ格好をした。豪雨を避けるかのようになり、大木の下や、壁の隙間に隠れる兵も多い。

美久は今度、左手を二度曲げ伸ばした。矢を止め、待機兵への一斉攻撃の合図だ。伝達兵が次々と伝え、第二の城壁内に隠れていた中山の兵に伝わり、乱れた連合軍に一斉に襲いかかった。

大君は額に手を当て、

「北山には風を読む者がいるようだ。鳥が使う道が見えるのか、そんな力を隠していたのか」

敵兵士は第一の壁からも撤退し始め、本陣まで戻る雰囲気を見せた。

それを美久は見逃さなかった。

「後退していくわ。後ろから進撃の大太鼓のリズム音を聞かせ、動揺させるのよ」

楯を持参していない敵兵らは、木板を探し出しては、その下に潜り込んだ。

さらには、よじ登ろうとしていた城壁の後ろへ隠れる兵も多い。

城から大砲の様に聞こえる太鼓の連打と攻撃が加えられた。弓矢の攻撃は収まったが。

正確な風に乗った弓矢は、既に中山軍の兵の戦意を喪失させ、空に戸板を掲げて逃げ腰になった。

第二の城壁の外へと退却していくのが見えた。

最前の城壁も取り返せる寸前だ。そこへ、城の後方、裏口に本部からの援軍が到着したと伝達兵が知らせにきた。

美久は本丸の後方に顔を向け、
「裏門を空けよ。本部平原軍を登城させて下さい」

震えながら座す伝達兵は、
「最後の逃げ道を、中山に教える事にもなります」と、必死である。

美久の口元は笑みがこぼれ、返事を返した。

「安心して、用意してあつた策です。ここが勝負所です」

その言葉聞いた賢龍は頷き、將兵らに命令を下した。

「裏門を開け、本部平原軍を入れろ」

木々で隠れた小さな裏口から、本部城の援軍兵二百人余が怒濤のごとく南から城内に入ってきた。

直ちに、今帰仁城の本丸内は新兵で埋まり、勢い北へ下り第二の城壁を奪い返した。野原に出される敵兵が増え、北山は優勢になった。

本部軍の大將が本丸に駆け上がってきた。

賢龍は怒鳴る。

「本部平原、遅いぞ！」

対して美久は笑顔で、大將の顔を覗き込んだ。

「久しぶりね……北山に忠実な本部平原殿」

「あつ、もしや美久様。中山軍の軍師では」

「ええ、でも今は、北山の人よ。この城で働かせてもらっているわ。それと敵は、名護軍のみではなく、くが国頭、はなび羽地、そして中山の連合軍よ」

「まさか」

本部平原は、城下に布陣する連合軍を見て唾然とする。

美久は鋭い視線で、

「一緒に戦ってくれるわね。あなたの軍は刀を扱える兵が多

いわ。頼もしいわ」

「ええ、も、もちろん」

「ならば、第一の城内の敵方の連合軍を今のタイミングで」

「はっ、はい。承知しました」

戦況は一変し、城内に歓喜の声が沸きあがった。

本丸から平地までの城壁の門を全て開き、本部平原軍の新兵の群れが、一気に下る怒濤の攻撃を始めた。

一方で今帰仁城の本丸まで、もがき苦しむ敵兵の声も響く。

多くの連合兵は、平地へ逃げだそうとするが、青江はそれをさせなかった。その場で中山軍に倒された兵士の苦痛にあえぐ声が、幾重にも重なり合った。

青江率いる軍勢は、徐々に城外に追い出された。

北山軍のそれぞれの兵は、勝利の雄叫びを挙げている。美久には負傷兵の声だけが聞こえ、呆然とした。

（姉さん、私はもう元には戻れないわ。多くの人を苦しめているの）

早速、火が付いた門や屋敷は水が駆けられ、崩れ落ちた門には石が積み上げられて城壁となった。

今帰仁城右手の川を挟んで、両軍が相対した。

中山軍の本陣にて、大將は將兵の報告を受けて、怒りを露わにした。

「何と、あの、あの美久がいるのか？」

大君は、驚きのあまり目をかっと見開き、瞬きを忘れるほどであった。

その将兵の報告は続いた。

「王妃、さらには最高軍師として北山側に付いたようです」

「美久、我らを裏切つて指揮していたのか………風を読み、矢を制する。裏から兵を登城させ、本丸から下り降りる加勢。そして城壁を奪回。さすがに見事じゃ」

他の軍師達が整列している中、青江は大君に近寄り進言した。

「私の、弓矢の策により北山王は討ち取りました。守護神は中山についております」

「うるさい。まだ北山には龍と称えられている王子がいる。それに先の戦では、北の策に陥り押され、城外に追い出されたであろう。美久が北山に付いていたのだ。お前らの目では見えん戦だった。あれは敗戦だ」

と大君は青江を叱った。

「どうして、あの美久がここに」

青江は、撤退させられた戦の策士は美久だったと聞いて、愕然としていた。

遠く山を背にそびえ立つ今帰仁城は、夕焼け雲で赤茶に照

らされていた。

八つの城壁内には味方の兵で埋まり、戦勝を祝うかのごとく、かがり火が焚かれていた。

大君の目には、一番上の本丸が映り、そこは他のどこよりも光り輝いて見えた。

（おいしい、あの娘はこれからの琉球にとって必要じゃったのに）